平成１７年（２００５年）１０月２５日（火）　（第３１号）

東九州支部報

橋本詳案会員卒寿祝福登山大会（10月2日）（久住山頂にて）

百々山（百周年にちなんだ名前の山旅）、砥石郷山、恐羅漢山、旧羅漢山（広島県）

（八月月例山行報告）

長野珪子

一路広島へ

八月二一日、朝四時五五分、中野車でサニー出発。五、六、七月は都合がつかず月例に参加できなかったので、久し振りの月例と長距離ドライブに心弾ませて車上の人となる。別府市美術館前で飯田車と合流し、雨がポツポツ降る中を二台の車で、大分自動車道から一路広島県を目指した。今年は水不足が懸念されたが、大分から広島までどの田んぼも青々した稲がきれいに育っている。中国自動車道では艶々した赤茶色の石州瓦の家々が、生育した稲に映えて美しい光景であった。鹿野ＳＡで小休止。ここまで走行距離は二四二㎞。戸河内ＩＣを出て加計町へ入った。

百々山（どうどうやま）へ

丁川（よおろ川）沿いに林道を上って行き、九時五十分、橋の手前で百々山への標識を見つけた。ところで、誰が雨男か雨女か、昨日までは真夏日でカンカン照りだったのに、無情にも今日は雨具を着るはめに。十時十分出発、少し歩いた所で先を行っていた安部さんが下りてきて「この上は砂防ダムで行き止まりだ。道を間違っている」と言うので、また車に乗り込み、林道をさらに上る。すこし行ったところで同じ

《　もくじ　》

百々山・恐羅漢山・・・	1
百年前の大分・登山界	2
大崩山へ	4
新百姓山へ	5
内山へ	6
韓国山岳会との交流	7
橋本祥案さん卒寿祝福登山	7
百周年記念登山	8
ｸﾞﾘﾝﾝﾃﾞﾝﾜﾙﾄ・ﾄﾚｯｷﾝｸﾞ④	9
私の無名山ガイドブック 23	10
今西錦司④	11
チベットの７年	12
お知らせ	12
後記	12

ような標識があったので資材置き場の広場に車を停めた。これらの標識は古くて矢印がはっきりせず、おまけに左右どちらに進むかが判りにくい形をしていてマチガッタものだった。

あるお笑いタレントの言葉を真似して「この道にマチガイナイ」。駐車場を十時三十分出発。沢の音を右手に聞きながら、大杉や照葉樹林帯の中の林道はジグザグに6～7回繰り返しただろうか。丈の低い淡いピンク色のヤマジノホトトギスがかわいい。（この山旅の花はヤマジノホトトギスに決定）。

林道の苔むした石垣は相当な年数を経ていると思われるが崩壊もなく、当時の丁寧な作りが偲ばれる。何のためにこの林道を開いたのだろう、お城があったのだろうか？など思いながら歩いていたが、一一時七分、T字路の突き当たりに説明板があり、昔、この先に寺尾銀山があったということが分かった。

ここから左手に約二〇m行くと金属製の立派な登山口標識があり、山道は足元の笹が刈り取られて歩きやすく三分程で稜線に、そこから七分で、一一時一八分、五五九、三mの山頂に着いた。

三等三角点のある山頂は広く切り開かれているが北側のみ少し展望でき、とんがり頭の形の良い山が見えた。雨が強くなって、一一時三二分下山開始、往路を下った。林道では山菜に詳しい遠江さんが夕食の一品のミョウガを摘んだ。いつもながら山菜に詳しく手早いのに感心させられる。駐車場に一二時四分着。

（百々山にて）

砥石郷山（といごうやま）へ

加計町の酒屋とスーパーで夕食と翌日の食料を補充し、スキー場で有名な恐羅漢山の登山口の牛小屋高原キャンプ場へ向かう。ロードヒーティング装置のある県道を走り、一三時二五分内黒峠を通過、一三時四五分キャンプ場到着。雨は相変わらず降っていた。

四阿で遅い昼食をとり、このあとまだ時刻も早いのでもうひとつ山、砥石郷山に登る事になった。一四時一五

百年前の大分・登山界

支部長　梅木秀徳

私たちの日本山岳会が百周年を迎えた。記念すべき年の意義などについては、すでに多くの人たちが述べており、今さら言及するまでもあるまい。そこで、当時の大分がどのような状況にあったか、改めて年表を見たい。

一世紀まえの一九〇五年（明治三十八年）は日露戦争が終わり、九月に講和条約が調印された時である。この戦争での大分県人の戦死者は、旅順港口での広瀬武夫はじめ一千人を超えたと言われるが、町も村も戦勝気分に酔っていたことは間違いなかろう。

街はどうだったか。大分・別府間の電車は早くも走っていたものの、その会社から電気の供給を受けて別府の町に県下で初めて電灯がともったのが〇四年、大分町はさらに遅れて〇九年だったという。大分市が市制施行したのは十一年のことだし、日豊線の大分駅が開業したのも同年である。県内にはまだ定期バスは走っていない。

こうしたことから考えると、その他の町や村々の姿はおおよそ見当がつくだろうが、遅まきながら県内でも殖産の機運はつよくなり、各地に工場が生まれ、農業などでもなども近代化が進み始めていた。久住高原に大分県種畜場が開設されたのが〇六年である。

では、そのころの大分の登山界は・・・。登山は結構に盛んだったと思われる。ただし、近世からの宗教登山である。山伏などの先達に導かれて、かなり多くの人たちが九重・中岳を訪れ、御池などを参拝している。

しかし、後にアルペン大名と呼ばれる中川久清（入山）のこと、あるいはW・ウエストンによる祖母登山（一八九〇年）は記録にあっても、まだ近代登山の風潮は起っていない。これは九州でも同様だろう。

ただ、山々に科学の力が入り始め、新しい登山への基礎づくりが行われていたことは確かだ。例えば、くじゅう山群を例にとると、一八九九年から陸地測量部（国土地理院の前身）による五万分の一地形図作成のための測量が始まっていた。

そうしたなかで日本山岳会が誕生したのである。それは大分・九州の山々にも新しい動きを生み出した。アルプスなどを中心に活動していた会員たちが九州の山々にも目を向け始めたのだ。くじゅう山群を見ると、後に会長となる日高六郎氏など、著名な会員たちが明治末期から次々に訪れているし、植物学者の牧野富太郎博士も調査した。

そして、大正から昭和の初めにかけて、九州でも「登山人」といえる人たちが活動を開始した。例えば、九州の山のパイオニアとされる加藤数功さん（加藤英彦会員の父）や、大正四年（一五年）に九州初の山岳会である「九州山岳会」を久住で立ち上げた工藤元平さん、法華院の弘蔵孟夫さん、湯布院温泉にあった溝口岳人さんらである。

こうして、大分の登山界は昭和一〇年代に一つのピークを迎える。それもやがて戦争で中断されるが、戦後はいち早く立ち直る。その中心となったのはまだ戦前からの登山人だった。ちなみに前記の工藤さんが日本山岳会に入ったのが昭和二年、加藤さんが同七年。ほかに創立直後からの会員だった六鵜保さんがいる。さらに、県登山界の重鎮だった人たちが続々と日本山岳会に籍を置く。別府で山岳会を組織していた永井清一さん、野口秋人さん、木本善重さん、日田の矢野真さんらである。その大方は故人となったが、このほど九十歳で久住山に登った橋本祥案さんは元気。その人たちによって東九州支部（当時・大分支部）が産声をあげた。

日本山岳会の百年。それは東九州支部の四十五年の倍以上の歴史を持つが、その百年が、大分の登山界に強く影響しているのを、改めて思い知らされる。

分駐車場出発。木々の青葉が雨にけむる中、曲がりくねったゆるやかな坂を上りを三十分ほどで、一四時四六分夏焼峠（ナツヤケノキビレ）に着いた。ここからは約一時間で恐羅漢山にも行く事ができる。砥石郷山への道は沢に新しそうな木橋が掛けられていたり、笹が刈られていたり整備されて登りやすい。

急な登りが続き、一一六六mのピークを一五時一〇分通過、ここでは、カワラナデシカ、アキアザミ、ツリガネニンジンなど見られ、もう秋の気配を感じた。小さな下りのあと、ほとんど平らな広い稜線を、ゆっくりとアップダウンしながら、いくつかのピークを越え、湿地帯を過ぎると一五時三一分、一一七七mの山頂。

（砥石郷山にて）

山名の砥石と見立てたのだろうか、大きな岩が横たわっていた。分水嶺踏査の時の習いで二等三角点の方向を確認したら四五度ずれていた。下山は往路を、夏焼峠一六時二五分通過、駐車場に一六時五五分着いた。雨はまだ降り続いている。ロッジの軒先を借りて夕餉のひと時を過ごした。二次会も九時半には終わり、空にはうっすらと星が瞬いて明日の晴れを期待させた。では、「お休みなさい」。

恐羅漢山（おそらかんざん）～恐羅漢山へ

三時起床。朝食の間雨は降ったり止んだり。少し頭が痛いと言う安部さんを残して、五時二〇分、五人が出発。スキー場のカヤバコースから立山尾根コースを行くことに。カヤバコースゲレンデ脇に、五時四十五分、登山道の標識を見つけ、今日の「マチガイナイ」第一声。蒸し暑くて雨具は脱ぎ傘を差して登る事にする。木で仕切られた段々は私の足幅にあっている。

ところで、この山域はツキノワグマが生息していると本に書いてあった。私は怖いので富士登頂記念に買い求めていたカウベルを、始めてこの日ザックにぶらさげて歩いてみた。熊には遭遇しなかったので効果があった？　おしゃべりの合間に落ち着いた音色が聞こえていい音だと思った。

草つきの斜面はまだ柔らかそうなオヤマボクチやアキノキリンソウを見せてくれた。自然林に入ると山道はどんどん高度をかせぎ、六時三十八分夏焼峠からのコースと合流した。ここからもう頂上は近い。南へ進み、六時四十五分広島県の最高峰に着いた。三等三角点は方向にマチガイナイ。雨で眺望は全くきかない。そばの大岩に登ったらと思ったがこれも雨で足元が悪いため誰も登らなかった。

さて、頂上を七時出発して次は旧羅漢山へ向かった。県境沿いのなだらかな稜線を行く。島根県側はブナ、広島県側は大杉と、樹林帯ははっきり分かれている。急坂を少し登ると山頂に七時三〇分着いた。切り開かれた頂上には、三角点のそばに、三笠宮様の立派な登頂記念碑が立ててある。この頂上にも大岩（高さ横幅各五m位）があり、壊れかけた丸太のハシゴが掛かっていたが、雨と霧で展望は期待できないので誰も登らなかった。

（旧羅漢にて）

下山は水越峠・十方林道へ

旧羅漢山からは水越峠を経て十方山へ登る組と、往路を引き返す組とに分かれるはずであったが、飯田さんの「この先は下りばかりじゃ」の言葉に全員水越峠へ向かって山頂を八時出発。

県境を行くこのコースはなだらかでブナと杉の樹林帯の中を中央分水嶺が一部走っている。あたり一面にモヤがかかり始めると、もののけでも現れそうな幻想的な世界となってくる。どんな天気の時でも山はいいなあ、この下山コースをとって良かった。急坂を下るようになり九時に十方林道に出た。

十方林道を下る

ちょうどタイミングよく安部さんが林道を迎えに上って来てくれた。林道は石がゴロゴロ、ガタガタで荒れていて、車はすぐ下のに置いてきたと言う。

十方山登山口は水越峠から〇．五kmほど下ったカーブにところで、ここから十方山へ登る飯田さん・中野さん組は出発（九時一一分）し、車は二人のためにここに残しておいて、私たち四人は約四．六kmの林道を歩いて下った。林道の右手の渓流は流れが速い。足元は昨日、今日の山行の中で一番歩きにくい石ゴロゴロである。二km位歩いた所に一軒だけ民家があり、そこのおじいさんと話したり、いけすに飼っているヤマメをみせてもらったり、どうしてドウドウヤマと読むのかなど尋ねた。昨日も加計町で数人に聞いてみたが誰も知らなかったので心残り、どなたか教えてくださ～い。

路面が舗装になるとまもなく二軒小屋の駐車場に十時二〇分着いた。ここは恐羅漢スキー場への分岐点で、きれいなトイレもあり便利な場所だった。山での雨がうそのように暑い太陽が照りつける中、雨具や人間干しなどをしながら、十方山二人組が戻ってくるのを待った。

参加者…安部、飯田、遠江、中野、長野、西（孝）

（付記）

安部さんが運転してきて下さった車を登り口にデポして頂き、中野、飯田の二人組は十方山を目指した。横川の源流を左下に見ながら、ほとんど崩壊した古い林道を一五分ほど登ると山道となる。上空からいつの間にか薄日がさし始めて暑い。着ていた雨具を脱いで先を急ぐ。

沢沿いの道は雨上がりで、ほとんどは沢と同じである。樹齢四〇年以上のスギの人工林の中をどんどん登ると次第に沢は枯れていき、ついに水音が絶えてしまった。雨上がりの蒸し暑い山道の登りが続く。

登り始めて四〇分ほどで左手彼方に高い鈍頂が見えてきた。地図で見ると十方山北東の一三一二ｍのピークか？次第に傾斜が緩くなるとあたりは天然林となり、薄日が雲間から漏れてくる。

どんどん先を急いでいるといきなり足下に黒いヘビ！足音で急いで草むらに消えていく。傾斜は一層緩くなり、さらにどんどん足を速めていく。とまた目の前にヘビ！今度は、マムシだ！ドンと足を踏むとマムシはゆっくりと慌てるふうもなく草むらへと入っていく。

ほとんど平らな道をマムシから数分で広々とした十方山頂に着いた。登山口から一時間十分であった。

（十方山より寂地山地方面）

低いクマザサの広々とした草原の山頂は時折り薄日がさし、三六〇度の展望は全て雲の下である。南西方向には寂地にいたる山並みが続いており、南は遠くどこまでも低い山並みが続いている。北に丸子頭の頂が見えるが、恐羅漢の稜線はガスの中である。ゆっくり展望を楽しみたいが、先に下山した四人を余り待たせるわけにはいかない。写真を撮ったら早々に山頂を後にする。

帰り道でまた同じ所にマムシがいた。そして少し下るとまた同じ所に黒いウシヘビがいた。二匹とも日だまりでせっっかくゆっくりと体温を上げようとしていたところを、お邪魔したようである。どんどん往路を下ること約五〇分で登山口についた。

（飯田）

大崩山へ ササユリをたずねて

（六月定例山行報告）

園田 暉明

六月一八日（土）夜八時サニー・スポーツ出発。飯田・中野さんの車に西・石川・牧野・得丸さん、私が同乗して、国道一〇号、三二六号を利用、唄げんか大橋、桑の原トンネルを出て直ぐに、国道から別れて右へ。桑原山登山口を通り、下赤祝子川林道との出会いから黒原峠を越えて祝子川へ、屈曲した狭い道であるが、対向車が無いのが救い。

桑原から上祝子までの間に幾度もシカに遭遇。数回にわたり、合計一〇匹以上は見た。また、他にイノシシに二回、タヌキ、イタチに一回づつ・・。夜の道はさながら獣たちの生活道路だ。

祝子川渓谷沿いの道を上り、大崩山登山口を過ぎて、渓谷に懸かる橋を渡る。そこから一キロほど行くと舗装が切れて次第に道が荒れてくる。昨年の台風で痛んだ道路はそのままだ。橋から二キロほどで落石に阻まれて通行不能となり、手前の道路脇の広場を今夜のキャンプ場所と決める。

一〇時を過ぎていた。私には初めてのキャンプ。道路の片側には山から延びた高い崖があり落石の危険は、と思いながらテントを張る。飯田、石川、中野さんは、ロウソクの火を囲みながら、好きな西部劇の話を肴に缶ビールでの宴。酒が苦手で、環境が変わると寝付きの悪い私はテントの中。

五時頃に起床し食事。ラジオの天気予報では雨の確率が高い。今年は空梅雨であるが、降らないことを願う。

今日のルートは私には初めての２枚ダキコース（ダキとは岩のこと。）で、心ウキウキ。六時出発。ここの標高は六九〇ｍ、山頂が一，六四三ｍで、その差約一，〇〇〇ｍを登る計算。（標高等は、全て中野さんがＧＰＳで計測。）前夜、落石により前進を諦めた地点で飯田、石川さんが落石を動かし、車を取りに戻るが、数百ｍ程先で、またもや路面が大きくえぐれて崩壊、車を諦める。

二ｋｍほど進むと、林道の分岐点に至る。直進すると前方に見える高い大岩峰の二枚ダキ経由山頂、右折すると坊主尾根経由山頂と飯田さんが説明。右折を選ぶ。尾根を巻くように曲がりくねった荒れた林道を行く。林道の脇には落ちた種子が発芽したと思われる若いヒメシャラが群生。生育条件が整へば急激に増殖する植物の秘めた力を再認識。

遙か右上方に、大きな屏風のような岩峰（坊主尾根の岩峰群であった。）が見える地点で小休止。（七時一八分）林道が終わり、自然林の中を少しいくと幅の広い尾根に出る。樹林の中にはっきりした踏み後があり、右（下り）は大崩山荘、左は山頂への案内板。坊主尾根の坊主岩の下に出ていた事に気づく。ここの山は岩壁部にアルミの梯子が多数設置されているが、直ぐにこれが現れる。（試しに数えたところ頂上まで２３脚？これ以外にも木の梯子、ロープ。）二番目の梯子の下の草むらに、根の浮き上がったササユリを発見。誰かが抜いたのだろうか、とにかく斜面に植え込んだ。

高さ約三〇ｍの垂直の岩壁の横を四〇ｍほど進み、その岩（坊主岩）の上に出る。一個の岩石で、そこから見ると岩の厚みは一五ｍ位であるが、地中に隠れている基部を除いても本当に大きい。坊主岩の名の由来は、この岩が花崗岩で白っぽく、樹木が生えておらず、ツルツルの坊さんの頭に似ているためか。大崩山の岩峰群が見え始める。ここで小休止。（八時十一分、一，一一四〇ｍ）

坊主岩からも急登は続く。一時的に岩が少なくなり土の斜面が多くなった地点で、ササユリ一〇本ほどが密生してるのを発見。淡いピンクの花も満開状態で、その名前のとおり葉が、笹の葉に似ている。その後も点々とササユリの清楚な花を見る。本日の山行のテーマ、ササユリとの出会いは達成。

垂直状の大岩壁の中腹に、幅二〇センチ程の足場が削りつけられていて、約一五メートルほどにワイヤー張の難所に至る。ワイヤーに掴まりながら慎重に進むが。高度への恐怖心がなければ、それ程危険ではないが、踏み外ずせば、確実に天国？に行ける箇所。経験が少なく、こ

の山が初めてという人もいたが、特に、恐ろしがる様子もなく、全員が通過。山好きが怖さを超越ということか。

小積ダキの上へは西、得丸さんを除いた四人が行く。二〇〇mを越す断崖絶壁の頂上は三六〇度のパノラマ。あいにくの霧で遠くは見えないが、自然林の緑の中、北方にはワク塚の岩峰群、南方には二枚ダキ、これら岩峰上のヒメコマツの大木。いつもながらに、その美しさ、雄大さに魅了され時の経つのを忘れる。我々を歓迎しているのか、近くでホトトギスの声。

小積ダキを過ぎると、岩も無くなりブナの大木の交じる原生林となる。りんどうの丘への分岐点を少し過ぎ、花をつけたヒメシャラのある地点で小休止。（一〇時三七分）石川さんが配った大きなトマトが、汗をかいた体においしい。

スズタケの生い茂る地点を過ぎ、勾配も緩くなって尾根に出ると、樹木も低くなる。前方の緑の中、まるで赤い布を張っているような箇所があり、近づくと遅咲きのツツジの花。まさに紅一点。所々にナナカマドの白い花。

やがて石塚山頂に着くが深い霧の中で、展望はゼロなので素通りして、三角点のある山頂へ到着。（十一時）樹林の中なので見通しは利かない。三角点の設置は、軍事目的が主体で、見通しの良い箇所の原則からすると、時期は太平洋戦争の少し前か。約六十年前のはげ山がこれだけ回復したと嬉しさの反面、その遅さに落胆。

西さんの解説で、ここの三角点は一等であることを知る。三角点柱頂上の一辺の長さは十八センチ。我々が実施した分水嶺踏査で度々目にした三等三角点に比べ格段に大きく立派。

（大崩山山頂にて）

小雨がぱらつき始めたので、昼食を急いで済ませ、牧野さんの音頭で恒例のヤッホーをして出発。スズタケの繁る中、僅かにある踏分の急斜面をほぼ真っ直ぐにひたすら下る。下り始めて三十分ほどで本降りとなりカッパ着用。間もなく勾配も緩くなって平らな広場にに出る。（十三時二七分　一・三〇〇m）ここから直進すれば二枚ダキとのこと。雨が強くなる一方なので、二枚ダキを諦め、右に折れ、急斜面の沢を下る。大きな石のガレ場で、雨で滑り易く、落石の恐れがある危険な箇所。雨と霧で少し薄暗い中、ゆっくり用心して下ること、約一時間、やっと沢から脱出して樹林の中へ。

勾配も緩くなったが、ここも雨で足場が悪く歩きづらい。約五〇分ほどでようやく古い林道に出る。何時の間にか雨は止んでいて、間もなく朝方の林道の分岐点に至り、更に進んで車の所へ。（一五時五二分）

上祝子の「美人の湯」で温泉に入るという女性軍三名と中野さんを残して、飯田号で石川さんと私は大分へ。厳しい行程にも、ギブアップせず、最後まで頑張り抜いた皆さん！本当にお疲れ様でした。

参加者…　飯田、石川、園田、中野、西、得丸、牧野

ササユリ

新百姓山へ

ナッツバキをたずねて

（七月月例山行報告）

安部可人

全天候型登山がモットーの東九州支部において、『史上初めて』のこと！前夜からの激しい雨と雷の中でやむなく中止決定したのが、七月一〇日予定の新百姓山への七月月例山行である。しかし、中止のままに終わるのは日本山岳会支部員としてプライド？が許さないと、にわかに雄志のみが思い立って変更実施したのが、宮崎支部の三〇周年記念集会、東九州支部の青少年体験登山大会等、各種行事の重なった七月の最終日であった。

しかし、当日も早朝から雨、よって当初予定していた囲峠経由で登って大明神越に下るルートはやめにして、直接大明神越に向かう。残念であったが、間断なく降り続いた雨の中を考えるとこの判断は正しかった。

飯田車（安部、牧野）中野車（西、園田）二台でサニー店を午前四時〇〇分出発。杉ガ越トンネルの宮崎県側出口に駐車。雨具を着用して六時八分に出発。

大明神社に六時一八分到着。安全登山のお祈りをして稜線歩きにかかる。緩いアップダウンの繰り返しの後、急な登りを突き上げるとブナの大木のある一〇〇四mのピーク、六時五〇分到着。蒸し暑さで雨具を脱ぐ人も出るが、雨はかえって強くなり、風も出てきて雷の音も聞こえ始める。

三〇分から四〇分足らずの登り下りが数度、楽ではない。遠くから聞こえていた雷の音が近づいてきた。樹林の中の道とはいえ何となく不気味である。アカマツが数本ある一〇二〇mピーク。くされ株のある一〇五〇mピーク。次は地図の一〇六八m地点の北西一〇〇mにある一〇五〇mのピーク（左手の自生のヒノキの大木が目じるし）へと、降りしきる雨と霧で薄暗いやせ尾根を歩く。何の楽しみもない。

標高一一〇〇m（または）一一三〇m）あたりで『天草山の会』の古いブリキのプレートを見る。杉ガ越えまで二三五〇mとある。これはよい目じるしになる。

七時三五分、折れ曲がって成長して、ちょうど腰掛けか子供の乗馬の遊びになりそうなブナの中木のそばを通過する。中野氏のGPSナビゲーター、悪天候でしょっちゅう「電波ロスト」する中、このあたりで「山頂まで六〇〇m」と教えてくれる。

このあたりから稜線は幅広くなり、ブナ、ミズナラ、ヒメシャラなどの美しい林となって気

持ちよい。古いガイドブックなどを見ると、この稜線はスズタケが密集しているとあるが、全く見あたず、見通しの良い広々とした林が続いている。最近消えてしまったらしいが不思議である。

絶えず鳴り続ける雷が怖い。雨もひどい。雷が怖くておまけに風も強くて傘もさせない。寒くなって雨具の上着を身につける。一人送れて歩く。もうリタイヤしたいが、西のおばちゃんががんばっている。がんばらねば・・・・。

七時五〇分頃、一二〇〇mピークを自分は頂上とまちがえる。鞍部に下り、ゆるゆる登り返すと二度目の新百姓山、一二七二mに八時一〇分到着（皆とは五分遅れ）。

（新百姓山頂にて）

今月の山行テーマである「ナツツバキ」は、もう時期が下がりすぎたためか、白い花が見あたらない。その代わりに稜線のところどころにはハクウンボクやハイノキの白い花が見られた。そして特に目についたのは、雨にけむる林の中に、赤く艶のあるヒメシャラの木々であった。

山頂ではいつもの儀式の後、雷の嫌いな西さんがいち早く下山を開始。そぼ降る雨の中にもめげずに缶ビールを開ける輩もいるが、私は西さんに続いて一足先に下山開始。いつしか雷は鳴りをひそめたが相変わらずの雨の中、つらい下降が続く。行動中にとったのは、アクエリアス五〇〇m一本とクリームパンだけである。休憩らしいものも特になかった。

大明神の社でやっと雨が上がり、トンネル到着は九時五五分。登り二時間、下り一時間二五分と、雨の中のあわただしい山行である。下山後すぐに着替えを行い、峠の少し下にある大きな東屋に移動し、ここで昼食をとる。そして昼過ぎに、帰途に温泉に入る組と大分直行組とに分かれて現地解散。

雨のため読図、記録はできなかったし、N氏のGPSはいつも電波ロスト。しかし私の記憶力はそんなに悪くないと思った。

参加者…安部、飯田、園田、中野、西（孝）、牧野

内山へ

トリカブトをたずねて

（九月月例山行報告）

中野　稔

大分市内から見ることが出来る山に登れると言う事で感慨深い物がある。市内から大分百山は二十座は優に見えると思う。

遠方や異国に何年か住んで居ると幼い頃の思い出の中に何らかの形で必ず出てくるものだ。

午前六時サニー出発。園田号中野号に三人づつ乗り扇山の自衛隊駐屯地入口へ向かう。飯田号が少し送れて到着。遠江号と四台でへびん湯を目指す。この露天風呂は、秘湯鍋山の湯と並んで全国区になっている。二十四時間営業で無料だ。鍋山の湯での年越しは最高だった。

鍋山の湯の駐車場に普通車二台を待機させてへびん湯の駐車場へ。ここから歩き始めた。コンクリートの歩道を二、三分登り左の林道に入る。四駆が入った形跡がある。

杉の植林の中を、高度を少しづつ稼ぎながら踏みしめて行くと林道終点に着く。此れからが登山道だ。

扇山から内山へ続く稜線の鞍部が木々の隙間から見える。ジグザグに十五分ぐらい登ると、小さな案内板がある鞍部に着く。西に行けば内山で、東へ行けば扇山だ。

（扇山山頂にて）

十分位で扇山（大平山）頂に着くと、まゆみが赤い実を沢山つけて歓迎してくれた。枯れていたがヒゴタイが一輪凛として咲いていた。吾亦紅（ワレモコウ）が幾本か咲いていた。

いつかラジオで聞いた小林一茶の俳句を、何故か思い出す。

咲き出でて
花の心算
かワレモコウ

解説では、花をからかった一茶の茶目っ気だと聞いた。

大平山山頂からの展望は久々の場外満塁ホームランだ。国東半島の山々が仲良く手を繋いでいた。山頂のはずれの方にある三等三角点に挨拶をして、一路内山へ向かう。

この稜線を石橋尾根またの名を石楠花尾根と呼ぶらしい。この稜線にはキノコが沢山生えている。とりわけタマゴ茸が目に付いた。白い塊から赤いタマゴのようなキノコが頭を出して、やがて赤茶色の傘を開く。食用だとインターネットに描かれている。

二度、三度、四度とアップダウンを重ねながら高度を上げていくと、石橋尾根の名に恥じない岩場の多いやせ尾根となった。しかし別名石楠花尾根の石楠花は内山主稜の直下近くに多少ある程度。

今月の山の花のテーマはトリカブトだ。内山から伽藍岳縦走路に出るとトリカブトの小群落に沢山出くわす。毒キノコや毒草は、使い方ひとつで人類に役立つものと成るのだが、此れに使う知恵を英知と呼びたい。ウイットとジョークの様に。

大平山から四時間かけて内山山頂に着く。初心者には勧められないコースだと思う。

山頂で北九州の三人衆と暫し快談を持つ。山での会話は一期一会に近い。人生でも数千人から数十万人と会話するも、記憶

に残るのは、千人にも満たない。親友や竹馬の友は数人で有り、親類などは精々百名程度だ。本当の出会いは、瞳と瞳が合った時に起こり、離れた時が別れと成る。出会いも別れも何時でも何処でも起こるが、本当の出会いは生涯に何度も無い。

（内山山頂にて）

九重山群にこだまする万歳

橋本祥案さん卒寿祝福登山

報告　後藤　実

午後一時に塚原越を目指す。午前中雲に覆われていた鶴見、内山もお昼前には雲散霧消して何故か、由布山山頂を包んでいた。

トリカブトの群落をいくつも見ながら下っていく。風倒木をかいくぐり、木や草を利用して、足下の危ない急峻な坂を下る。塚原越えからは、兎落としの道を下り鍋山の湯に飛び出す。

常連のお客であろうか、お湯を抜き、掃除をしてお湯を張っている最中だった。約二十年前には間近まで乗用車でも来れるぐらい、道は整備されていたが、最近は荒れ放題で四駆でも乗り入れは困難だ。三百メートルぐらい手前で車止が出来そこに五，六台程度停められる駐車場が出来た。

たぶん今宵も全国から物好き達が、ひと時の安らぎを求めて泥湯に浸かっている事だろう。特に月夜の風呂は郷愁を誘う。

参加者…西、堤、遠江、長野、徳丸、飯田、園田、中野

橋本祥案会員の卒寿（九〇歳）の誕生日を祝う登山会が一〇月二日（日）、久住山で行われ、五十数人の山仲間が山頂に集い登頂を果たした橋本さんの偉業をたたえ、万歳で祝福した。

橋本会員は十歳のとき高崎山に登ったのを機に山登りを始めたという。いらい、富士山や北アルプスをはじめ八十年間にわたり各地の山に登り続け、その間、祖母～傾縦走路の開拓にも携わるなど、東九州支部の大先輩であることはもとより、県下の登山界を代表する超ベテランで、多くの後輩も育ててきている。

この日の祝福登山会は日本山岳会東九州支部と、同じく橋本会員が所属する府内山岳会（同会の初代会長は橋本会員）が個別に持ち上がった計画を、橋本会員の誕生日（二日）に合同で実施しようということになったものである。

午前七時ごろから会員をはじめ、呼びかけにより橋本会員の元気にあやかろうという、一般参加者も続々と登山口の牧の戸峠に集まり始めた。橋本会員にゆっくりとしたペースで登ってもらうため、府内山岳会員など一部の人たちで、七時四十分に一足先に出発した。　このルー

韓国山岳会・蔚山支部と交流会

報告　加藤　英彦

韓国、蔚山広域市の韓日親善協会の一行が一〇月六日～九日に来分したが、この中には韓国山岳会蔚山支部のメンバー八名が参加していた。同じ岳人として日本山岳会東九州支部との交流の希望があると、訪日団受け入れの大分市役所観光課から連絡があり、急遽九月二八日に役員会を開きその受け入れを決定した。

一〇月七日（金）午前一〇時〇〇分より、大分市「コンパルホール」の特別会議室で交流会がもたれた。蔚山支部からは李建旭顧問、丁玉吉支部長他六名、東九州支部からは梅木支部長、西事務局長他一〇名が出席した。

席上まず、市の伊達観光課長より挨拶があり、交流会がもたれたいきさつや意義の説明があった。このあと、李顧問より今回の訪問の意義と親睦の挨拶があり、続いて梅木支部長より歓迎の挨拶があった。そして、蔚山支部の出席者の自己紹介、続いて東九州支部出席者の自己紹介を行った。

そのあとの相互交流では、出席者のそれぞれの韓国、日本との個々のかかわりや、各々の過去の山歴についての披露などがあり、興味ある部分には双方が熱心に耳を傾けていた。そんな中で特に、今年マッキンレーに登頂した星子会員が、最高年齢登頂の記録を更新したということには、関心をもって聞いていた。

その後、蔚山支部李顧問から今後も継続した交流を続けたいという申し出があり、梅木支部も同感の意を表明した。そして、具体的交流は双方が登山隊を送って山での交流会を実施することとなり、とりあえず初回は来年の秋に、蔚山支部が送り込む登山隊を大分で迎える形で第一歩を踏み出すこととなった。その翌年は東九州支部が韓国に登山隊を送り、その後は交互に登山隊を送ることで親睦を深めることとなった。

交流会のあとには相互に記念品を交換し、全員そろって記念撮影をして来年の再会を誓い合って、バスで次の訪問地の阿蘇に向かう一行を東九州支部会員が見送った。

東九州支部では過去にも韓国・仁川の山岳クラブを受け入れて、九重山で交流会を行った経験もあるので、蔚山支部との交流もうまくいき、両国の関係発展に民間団体として寄与できることを期待している。

ちなみに、記念品として頂いた、ものは、韓国山岳会のバンダナおよび湯飲み、そして蔚山近郊のパンフレット等であった。また、東九州支部からの贈り物は日本山岳会のバンダナおよび「大分百山（改訂版）」であった。

出席者…梅木、西、大平、星子、首藤、興田、加藤、甲斐（良）、野村、飯田、後藤、中野

トは七月に開かれた青少年体験登山のときにも同会員が登ったルートで、この時には荷物を全てを自分で持って往復したため、下山時にいささか疲れたことから、今回は同行者が手分けして担ぎ、「せめて水筒、弁当は自分で持たねば登山にならない」というのを説得し、空身で登ってもらった。

この日に備えてすこし運動してきたという橋本会員は、すこぶる快調な足取りで、前後を守る私たちが少しペースを落とすよう注意するほどである。出発時には峠はガスがかかっていたが、沓掛山までくると今日の登山を祝福するかのように、見る見るうちにガスが晴れ、上空に青空が広がってきた。

まもなく、予定時刻に集合した参加者たちも追いついてきて、口々に「おめでとうございます」と祝福する。それに応える橋本会員の笑顔が晴れやかだ。

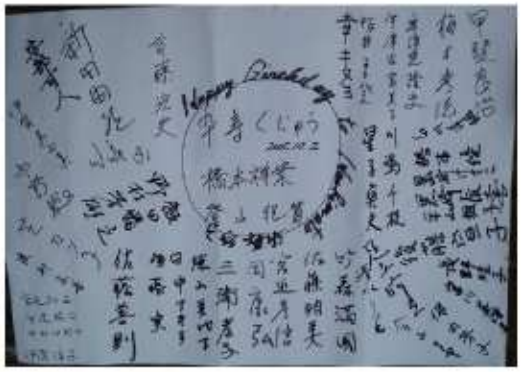
九時四十分、扇ヶ鼻の分れで大休止していると、長寿にあやかりたい人たちが「一緒に写真を撮らせてください」と殺到、まるでスター並みの人気に橋本会員もご満悦。いき交う見ず知らずの登山者も、橋本さんが九十歳で久住山に登っていることを知ると一様に、えーっと驚き「おめでとうございます。いつまでもお元気で！」と激励していく。その足元には薄紫のリンドウが祝福するかのように微笑みかけていた。

北千里まで来ると目指す久住山がほれぼれするほど端整な三角峰を突き上げ、「私が見守っている。けがをしないようゆっくり登っておいで」といたわっているようだ。周囲のイタドリは黄色く色づき、深まりゆく秋を感じさせる。星生崎下の岩場を慎重に通り、避難小屋でトイレ休憩のあとといよいよ久住山頂への最後の登りである。途中でゆっくり休憩をとりながら、先着した人たちの拍手に迎えられて予定通り十時五十分、久住山頂に到着した。

早速、橋本さんを囲んで記念撮影。（一面、表紙の写真）梅木支部長、佐藤府内山岳会長、首藤大分県山岳連盟会長などからお祝いのことばがあり、続いて橋本会員の謝辞、そして本人作の「九重連山に題す」という詩吟が朗々と披露されて大きな拍手を浴びた。さらに、梅木支部長の「九十歳で久住山に登頂した橋本さんの健康を祝してバンザーイ」に全員が唱和、その声が九重の山々にこだました。

（朗々と吟詠の橋本さん）

山頂でゆっくり弁当を食べ十一時四十五分に山頂をあとにし、途中、久住別れの避難小屋で参加者全員が祝福の寄せ書きサインをし、十四時五十分、牧の戸峠に下山した。



最後に宇津宮副支部長から「九十歳で久住山に登るという体力と精神力に感服しました」とねぎらいの言葉があると、すかさず梅木支部長から「次は九十三でくじゅうさん」の言葉に拍手が起こった。そして橋本会員から「生かされていることに感謝しています。きょうは皆さんの支えをいただき、無事久住山に登ることができました。まだまだ登山は続けます。富士山には2回登っていますが、死ぬまでにもう一度登りたい」とお礼のあいさつがあり、記念品として本人が彫り、額装した版画を参加者全員に配られた。

百周年記念山行

（十月十六日）

西　孝子

毎年、高輪プリンスホテル受付の横で、案内を頂く。体力不足が加速しているため、近場をと、コース1を歩こうと長男・穂高の家を六時に出発する。食糧は昨夜長男に買ってもらってある。支部山行ではポーター中野にお願いするが、今日は気合いを入れて自分で持ち歩く。ネパール行きトレーニングのつもりで参加だ。重い靴もそのためである。

小雨の中、「曙橋」より「新宿」へ、さらに中央線L特急で「高尾」駅着。八時一二分発のバスに乗り、一五分ほどで「小佛」バス停下車。

雨具はつけずに、ザックカバーが肩に被さって、帽子の長いふちで、何とか傘もささずに歩くことが出来た。

リーダーに「ビスタリー」をお願いする。一〇メートル遅れると待っていただく。車道歩き二〇分で登山口。登山者が多いのか、よくみかけた道だ。なだらかな登り・・・、尾根すじで晴れればいい・・・、前の方を気にしながら・・・、呼吸をととのえ・・・、汗をかきかき・・・、メガネのくもりも拭わずにすすむ。休止の時も私だけ先に行く。

一人だけ近づいてくる。なぜかと聞けば土地の方で、くわしい説明をしていただく。仲間はみなピンクのリボンを、蝶々のかたちにむすんだものだ。「幼稚園児だ」とみんなニコニコ。植林の中の道、雨のしずくが大きい。

景信山頂小屋に一〇時到着。七十八年になる小屋は、丸太をそのままの柱だ。杉の柱だ。栗の枝もそのまま使っている。山頂の直下にはりっぱなトイレもある。

「あまざけ」がひやも美味しい。よく売れている。「富士山は？」「ご来光は？」と聞くがいずれもガスの中。天人の世界だ。写真を見せてもらってその気になる。

三等三角点で今西流の山頂行事・・。熊本の人と一緒に・・。「もう二度とこないよお」のバンザイに他支部の人はみなキョトン・・。私の馬鹿ぶりを眺めている。全員で記念写真撮影。

景信山の名前についてははっきりした話しは聞けなかった。

下山開始（一〇時五〇分）。途中の分岐で案内人が「すぐに広い道に出ます」と説明。進むとやがて新道、で雨水をふくみぬかること・・・。ポイントで自然保護の方の説明があり、高尾の森づくりを聞く。。

小下沢ベースへと下る。せまい道に気をとられながら下り、沢の音が大きくなると橋をわたり、植林の中をそのまますすみ、一時間で着く。けっきょく一番ハードなコースを下ってしまった。

豚汁を腹いっぱいいただく。キッチン当番さん苦労様でした。ここでも写真におさまり、新しい道の林道を、沢を友にすすむ、やがて日影バス停へ。ＪＡＣの印が、七二七．一（高度）に登れて、また一山ふえた。

無事穂高の宅へついたものの、その夜の地震に驚く。翌一七日、十一時半、我が家へ。皆様のおかげで百周年の行事に出席出来た子のと感謝。

ＪＲ新宿←→高尾　五四〇円（×２）
バス高尾→小佛　二二〇円
バス日影→高尾　二二〇円
計　一，五二〇円

グリンデルワルトトレッキング（その四）

八重康夫

九月二一日

やはり午前三時ごろ目が覚める。興奮しているのだろうか。時差不慣れのせいか。今日は山歩きの一日である。朝食は７時からだったし、スタートが遅いので、長丁場のルートを選ぶか、一度決めた後もまだ最後まで迷った。天気はまあまあのようだし、せっかくだから行けるとこまで行ってみようと考えた。

グリンデルワルト駅でまず切符を買おうと思ったが、どうも良く通じない。あらかじめ、スイスパスを持っているので、通常の列車の部分ならこれで良いだろうと思ったが、どうもそうではないらしい。

コースはグリンデルワルトからヴイルダースビルまでが普通の電車で、そこからシーニゲプラッテまで登山電車、あとは歩行一五㎞でフィルストに着く。そこからゴンドラでグリンデルワルトに降りるというものである。したがって、自分はヴイルダースビルまでスイスパスを使って、後の登山電車とゴンドラはその時支払えば良いと思っていた。窓口でそれはだめだという。スイスパスは二〇％引いているのでその差額を払わねばと言われ払った。しかし75SFもした。二〇％の差額の割りには高いと思ったが、どうしようもないので払った。

テレホンカードみたいなカードを別にくれた。これが差額分の乗車券だと思った。相変わらず、入口の改札は無く、途中で改札するだけである。このとき、スイスパスとこのカードを見せてＯＫだった。さてヴイルダースビルから登山電車に乗ったら、また途中で改札に来た。お金を支払おうと思ったら、どうも皆あのカードを見せているだけである。自分もそうして見たら、ＯＫだった。その後のフィルストからのゴンドラ代までそのカードに全部含まれていたのだ。どうりで高かったはずである。

日本アルプスの立山で、トロリーバスやロープウェイを乗り継いで行ったとき、そこそこで次々と高い乗車賃を払ったのでここもそんなシステムだろうと思ったが違っていた。出発前、これでは2SFが足りないと思って両替しに行ったのが取り越し苦労だった。途中山小屋で飲んだコーヒ代の3.5SFしか、このトレッキングでは他に使わなかった。

ヴイルダースビル（584ｍ）からシーニゲプラッテ（1967ｍ）まで、登山電車はジグザグに、五二分もかかって登るのである。天気もさらに良くなり、シーニゲプラッテからの景色もなかなかの展望だった。ここから途中ファウルホルン（2681ｍ）を越して、フィルスト（2168ｍ）まで水平距離、一五㎞を歩くのだ。歩行時間は解説書では七時間五〇分になっているがシーニゲプラッテで既に九時三〇分だったが、フィルストの最終時間は六時過ぎというから十分な時間はあるというものだと安心して出発。天気良く、景色は良いが、道がきれいに整備されていて、歩くにはやや面白みに欠けると思った。

一一時三〇分、ウエーバー小屋に着く。予定表では、三時間三〇分かかることになっている。しかし二間で着いてしまった。（11116歩）そんなに飛ばしていないのに。ここで、写真を取ってもらったのが山小屋の女主人のようで何か頼まねば悪い雰囲気だったので、コーヒーを所望した。これが3.5　SF（約300円位）だった。

一二時四一分、ファウルホルン山頂（2681m）（15908歩）ここでの景色は最高であった。アイガー、メンヒ、ユングフラウなどの山々が見えた。ここではさすがに感動した。ややガスがかかる傾向にあったが、それでもその合間に見える山々をバックに写真を撮ってもらった。道は雲上の散歩道といった状態であり、とても登山道とは言えない。Wild好みの方は物足りないと思われる。自分もWild好みと言うほどでないが、やや物足りなさを感じた。

なぜか、だんだん英語が快調になってきた。要は単語を出せば良いだけであって「フィルストへの道はこちらですか？」と聞くとき、指差して「フィルストＯＫ？」と言えば良いのである。スイスではドイツ語が主だが、英語で聞けば、英語で返事してくれる。

一三時〇三分、軽い食事を取って、ファウルホルン山頂出発。ファウルホルンからはほぼ下りのみである。少し降りたところから、ガスがかかり出した。標高の少し低いとこから下は、ずっとこの状態みたいであった。途中、ファウルホルンに登っている人に出会ったら、「ファウルホルン　イズ　グッド　ウエザー」と言ってやると皆にこにこしてくれた。

一三時三六分、2240ｍ（19853歩）バッハアルプゼーの湖ここには多くの人が居たが、残念ながらここもガスっていて、展望は良くなかった。解説書にはマーモットがいると書いてあったが、出会えなかった。

フィルスト（2168ｍ）一四時二三分、（20412歩）に着くと、テレキャビン駅があり、これに乗って、どんどん下って行った。三〇分かかった。鶴見岳ロープウェイは一〇分だから、その三倍であり、結構長く感じた。下

にも散歩道のような道がずっとあり、歩いて登っている人や、降りている人の姿が見えた。途中カランコロンと鐘のような音がするのは、牛かヤギなどの首にかけた鐘の鳴る音だとわかった。

グリンデルワルト（1055m）一四時五五分着。ほぼ街中のそばまで降りてくる。したがって泊まるホテルまで直ぐであった。時間が少しあったので、お土産を見て回った。それにしてもここは何と日本人観光客の多い所だろう。日本語観光案内所があるのも頷ける。

さあ、明日は帰るだけの日、グリンデルワルト～インターラケン～ベルン～パリリヨン～ドゴール空港～成田空港～羽田空港～大分空港というハードスケジュールである。

どこかで乗り違えたりしたら、定刻には帰れない。一番緊張する一日である。明日いる物、パスポート、切符、お金を、ウエストポーチのしかるべき所にしまって、準備する。これらは一応外出する時も常につけて歩いた。最初目に見える所に付けるのは良くないかもとも思ってが、治安の良い所だし、格好が山行きの格好なのでそれ程狙われることも無いだろうと思って、当初予定していた、服巻収納ポーチなどは旅の途中、パリからグリンデルワルトに向かう頃から使わなくなった。いちいちこれから出し入れするのは大変だからである。準備し終わり、午後9時には床についたが、なかなか寝つけなかった。

（続く）

私の無名山ガイドブック23

とぎし山（四〇九・六m）

飯田勝之

国土地理院の二万五千分の一地形図には「トギシ山」と書かれている。梅木秀徳氏（東九州支部長）編・著の「大分県主要山岳丘陵島嶼一覧」には戸岸山という山名も併記されている。

この山に興味を持ったのは、はじめは一〇年ほど前のことである。『別府湾リレー登山』のルート開きのため、樅木山～御所峠間に通いつめたことがあるが、この時にふと存在が気になって、一度登ってみようと思ったことが始まりである。

御所峠のすぐ東に、地図上では三六六，三mの三角点の設置されたピークがある。ところがここの三角点がなかなか見つからず、このピークでは通るたびに時間をかけて探しき回ったものである（今も見つかっていない）。ここのピークは北側はヒノキの人工林で視界が効かないが、南側は伐採されたあとが原野のまま放置されていて展望が良く、そこから少し東南の方にやや高い峰が見えている。地図を見ると「トギシ山」とあり、その一風変わった名前と、ほぼ平らでどっしりとした山体は、何となく惹かれるものがあった。

地図で見ると、樅木山を盟主とする樅木山脈（佐賀ノ関半島から樅木山、白山、九六位山を経て大分市吉野にいたる山塊）の主脈から、藤ノ尾山の東肩で南に派生する支脈がある。その支脈は四〇八mの標高点で一方は東南方向へいったん落ちて白石山へとつきあげ、そしてもう一方は西方向へ小さく下がったあと緩い上りで長い稜線となり、さらに少し下ったあとせり上がったところにトギシ山の標記と三角点がある。

この山は遠目には判然としないが、入ってみると素晴らしく自然度の高い山であることが、後日登ってみて分かった。三角点山頂から四〇八m標高点付近までの長い稜線の南側は、すべてがヒノキやスギの植林地だが、北側の斜面は全山見事な照葉樹林なのである。この林の面積はかなり広く、林道の入り口付近から始まって、藤ノ尾山東肩から派生した稜線まで続いている。大分市近郊の里山では、九六位山の下にある天然林（通称官山）を凌ぐ面積で、他にこれほどまとまった面積の、照葉樹の天然林を私は知らない。おそらく県内でも、自然公園地域以外でこれほどの自然度を持つ林はないと思われる。

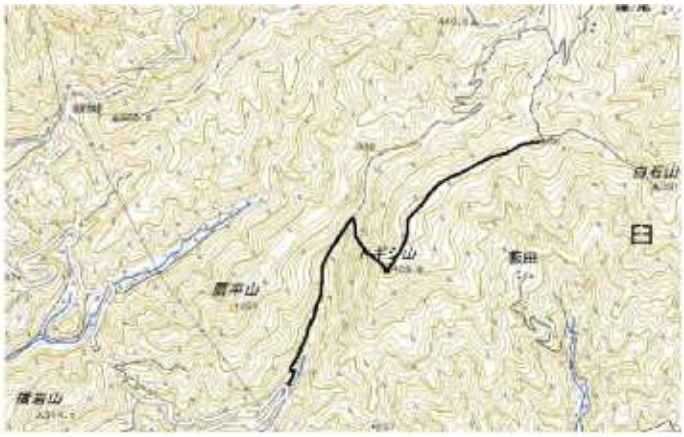
林のあちこちにある小さな水たまりや湿ったところはヌタ場となっていて、真新しい猪の泥浴びの跡も見られ野趣豊かである。もちろん人里近い山なので、千古斧を知らぬ原生林とはいかないし、たぶん戦後の一時期まで薪炭林として昔から何回となく伐られたであろうことは、林の木々の傍芽の姿を見ればよく分かる。六ケ迫川の源流の谷筋には古い炭焼き鎌の跡も残っている。

林内の急斜面を歩けばツバキ、ヒシャカキ、クロキ、ネズミモチ、ヤマモモといった中低木がほとんどで、稜線近くなるとクスやアラカシカシ、タブ、イスなども見受けられるが、林全体はまだ復元過程にある。しかし、このまま状態を保持していけばいずれは立派な、まとまった照葉樹の極相林となり、臼杵市民にとっては貴重な財産となるであろうと考える。。

私は初めてこの山に登っていらいすっかり、この林に見せられて、たびたび訪れている。三角点山頂に登るためには、御所峠から臼杵に向けて下るとトンネルを過ぎた少し先に大きなヘヤピンカーブがある。そのカーブの左側に東へと林道が延びているが、この林道入り口が登山口となる。林道は入り口にゲートがあり、常時鍵で閉められているが路面は荒れて、深い草に覆われていて、鍵を開けても車の乗り入れは無理であろう。

ゲートの脇を通って林道を進むと、少し先で一度S字型の折り返しのあと、右下の谷間に六ケ迫川源流の沢音を聞きながら谷の奥へ奥へと入る。途中、左上斜面が大きく崩壊して路面を塞いでいる所などを通過し、ゲートから約三〇分ほどで、右下方に水音が聞こえていた沢が林道のすぐ脇に近づいてくるあたりから左岸に渡る。沢は小さなきれいな流れで、沢を越えて対岸に渡るとそのまま斜面にとりついてのぼることとなる。ヤブ

（トギシ山にて）



のアルミ製のものと、ＯＨＣのプラスチック製の山頂標識があり、南側はヒノキの植林地で、北側にはアカマツやタブの高木がそびえて展望はない。

山頂から東になだらかな稜線を行くと、五〇分ほどで四〇八ｍの標高点に達することができて、心地よい稜線歩きが楽しめる。また、さらに稜線伝いに四〇分ほどで白石山へと行くこともでき、北に稜線をたどれば立派な道に出て二〇分ほどで藤ノ尾の集落に出ることもできる。

（地形図＝二万五千分の一…坂ノ市）

ツバキやヒシャカキ、クロキなどの木々の下には下草もなく、どこを歩いてもさしたるヤブこぎにはならないが、かなり急な斜面の直登である。

山頂から北西方向に派生する尾根状の斜面があり、これを登ると点々と赤いテープの目印も見つけることが出来るが、見つからなくてもひたすら直登すればよい。沢から登ること約三〇分足らずで少し傾斜が緩くなり、タブやイスノキ、クスノキなどが目についてきて、やがて前方に明るい空間が見えてくると山頂である。

四等三角点のある山頂にはトギシ山と書かれた臼杵市山岳会

今西錦司 ④

西　孝子

額をさがしていたら二枚、五号に伸ばした写真が出てきた。一つは佩楯山頂（現豊後大野市）の昼食の時のもの。支部長以下が、先生が三角点に関心があるということを知らずに案内した。山頂はＮＨＫのアンテナ工事で、三角点は行方不明。故三重野氏に木の柱に筆で書いてもらい、夜山頂にたてたことも思い出す。二回目も下見をせずに案内して三角点は不明。

三度目にして、真新しい三角点（一等本点）を前にしてご機嫌な顔である。うなぎ、ウイスキー入れ、コップ・・。大分合同新聞社の月刊誌に載ったのもで「ええ顔してるな！」と見る人がみんな喜ぶ笑顔である。

もう一枚は、宮崎県椎葉村と南郷村との境にある『笹の峠』（一等三角点）の帰りに、民家の縁でいっぷくしているところ。

写真で気づいたこと。

一．帽子…ハンチングとベレー
二．メガネ…茶色ふちどりとニトンの金縁
三．セーター…編み方が違うがいずれもグレー
四．開襟シャツ…色違い、厚さは同じ
五．ズボン…紺色で純毛（昔で言うサージ）
六．靴下…色は違うがいずれも厚手を重ね履きし、ズボンの裾を中に入れている
七．靴…ビブラム底の皮の軽登山靴
八．ザック…黄色の小型
九．ショルダー…グレー
十．杖…細い杖（これは体重を支えるのではなく、触角の役目だと思う。白内障が進んでいたのでは？
十一．白いコップ
十二．ウイスキー入れ

姿では煙草ののみ方、写真を焼く時に反対に？いや、両手使いだったのでは・・・？今頃気づいたのがくやしい。天国に向かっておたずねしたい。残念・・。なぜ同じ服装を・・・？よく考えると、京都を中心に夏は北方へ、冬は南方へと計画していたのである。

杖のことでは思い出がある。四国の牛ノ峰（愛媛県双海町と内子町の境）で、ちょうど成人式の日の頃。バンザイにあわてた私、近くにある松の枝を手ごろな長さにに折り、三回上げた後、枝を見て重いのでは？先生、わざわざ私の所に来て「軽いな」と・・・・。常にグループの動作にも気を配っているリーダーであった。この日の杖は四国百山に大きく出ている。よく見るとやはり太すぎる私の杖である。

ザックとショルダーは行動中は、身体からはなさずに歩いておいでであった。ある時、その持ち物を通路に置き、遠くの鳥居に向かい柏手（かしわで）をうつ。なぜ？今日無事登山が出来たお礼だとおっしゃる。道祖神にも手を合わせるお姿を思い出す。

それにしても南と北、今頃気づいたのも写真のおかげである。ダンディな先生！！

今夏の読書
『チベットの七年』

安部可人

この本に感動したという今西錦司博士は、ハラーに一〇年おくれて生まれている。ハインリッヒ・ハラー（オストリア生まれ）もまたヒマラヤを夢みる。その実現のため、意図して名を売ったのがアイガー北壁の初登はんである。（登頂記『白い蜘蛛』、邦訳あり）

ハラーは一九三九年八月、ナンガ・パルバット踏査行を終えて、帰国途中、ドイツ宣戦布告、インドのイギリス軍の収容所に拘留される。幾度か試みてついに脱走に成功。

同じ遠征隊のアウフシュタイナーとハラーは登山家の体力と技術にめぐまれ、徒歩で寒気、飢え、危難を勇気で克服。終わりはチャンタン高原の盗賊地帯を横断し、一年九ヶ月（ときにはエベレストを眺め、楽園で過ごすこともあったが）かけてラッサにたどりつく。

鎖国状態で外人に冷たいチベット。それでも親切な遊牧民、巡礼者、キャラバン隊に食住を与えられ、最後には乞食同然であった。

この紀行の後半はラッサでダライ・ラマに優遇され、生涯の友となっていくが、当時のチベットの生活習慣に興味をおぼえるものの、あの苦難の旅をあとにしてはもう読書意欲は消えてしまう。

ハラーは日記を残してこの本を完成。記憶力の良い文筆家である。長旅を可能にしたお金は脱走の時に相当持参したと思うが、当地では貨幣の価値が十分あったのだろう。（一九八九年、白水社、福田宏年訳…コンパルホールの大分市図書館で借りました）

お知らせ

十一月月例山行のご案内

・月　日…十一月十三（日）
・目的地…百合野山（日出町）
　フジバカマの山旅
　サブテーマ…百周年にちなんだ名前の山
　旅山）
・出　発…午前六時サニー発
・現地集合…豊岡駅前午前七時
・この日は経塚山の山頂でナベパーティを予定しています。

十二月月例山行のご案内

・月　日…十二月十七日（土）
・目的地…祖母山（竹田市）
　ホトトギスの山旅
・出　発…サニー午前六時発
・現地集合…午前八時三〇分
　五ヶ所高原、北谷登山口発

※　**重廣恒夫**さんの今年の山行テーマ**「三県境を歩く」**で、祖母山と中腹の三国境を一緒に歩きます。

一月月例山行のご案内

・月　日…一月二二日（日）
・目的地…鹿嵐山（県北地区・院内町）
　カンツバキの山旅
・出　発…一月二二日午前六時サニー出発
・現地集合…院内・田平の第一登山口
・会　費…一〇．〇〇〇円
　（一泊二食）

なお、**当日の昼は十二月の支部月例山行で祖母山**にご一緒します。また**翌日一八日（日）は花牟礼山**に支部会員と一緒に登る予定です。皆さん是非参加下さい。（一八日朝、現地に直接行かれる方は、阿蘇野の栢ノ木の広域農道と県道の交差点に、午前九時集合とします。）

※　**事務局までに①「前日の山行のみ参加」②「忘年会のみ参加」③「翌日の山行のみ参加」④「前日の山行と忘年会のみ参加」⑤「忘年会と翌日の山行のみ参加」⑥「全てに参加」**の区分で一二月四日までに（TELまたはFAXにて）申し込んで下さい。

支部忘年会のお知らせ

今年も重廣恒夫さんを囲んで

今年もおなじみの重廣弘恒夫さんを囲んで、支部忘年会を予定しています。皆さん多数ご参加下さい。

・月　日…十二月十七日（土）
・場　所…奥阿蘇の宿「やまなみ」
　熊本県産山村田尻
　TEL 0967-25-2414

後記

○　一〇月のある日、国東の山でたくさんのアケビ（木通）を見つけました。種の多い果実を口にすると懐かしい子供の頃を思い出しました。

○　アケビの仲間には、アケビ、ミツバアケビ、ゴヨウアケビ、常緑のムベなどの種類がありますが、この日のものはアケビでした。

○　果皮は、挽肉か魚のすり身を詰めてフライに揚げたり、そのまま煮付けたり、ゆでて和えものにすると美味しいそうです。

○　アケビの隣にはやはり水辺を好むムクノキがまだ青々とした実をつけていました。

○　このムクの実がまた子供の頃を思い出させます。黒紫色に熟すと独特の甘さがあり、子供の頃にはよく食べたものです。

○　鳥も好んで食べ、特にムクドリがよくやってくるので、ムクドリと呼ばれるようになったとのことです。

（K・I）

日本山岳会東九州支部報　第３１号

２００５年（平成１７年）１０月２５日（火）
発行者　梅　木　秀　徳
編集者　飯　田　勝　之
発行所　〒870-0021
大分市府内町１－３－１６
サニースポーツ内　西　孝子方
TEL･FAX　097-532-0926
題字　佐藤正八